

# 奴隷貿易から合法貿易へ

—ラゴスの場合—

布留川 正 博

## 要 約

1807年にイギリスで奴隷貿易が廃止されて以降、イギリスは他国とのあいだに条約を結び、奴隷貿易を制圧する政策をとった。しかし、イギリス海軍の監視の網の目をかいくぐって、密貿易が栄えた。この貿易拠点のひとつが西アフリカ奴隷海岸のラゴスであった。地理的条件にも恵まれ、ラゴスは19世紀前半に西アフリカ最大の奴隷貿易拠点となった。イギリスはこれを座視できず、ラゴスの内政に介入し、王を交代させ、奴隷貿易禁止の条約を結んだ。ラゴスはその後、イギリスの植民地となり、イギリスをはじめヨーロッパとのあいだで合法貿易を行った。その中心的産物がパームオイルとパーム核であった。対外的な奴隷貿易は禁止されたものの、域内の奴隷取引や奴隷制は残存した。

キーワード：ラゴス、奴隷貿易、イギリス海軍、合法貿易、パームオイル

## 1. はじめに

ラゴスは、面積2平方マイルくらいの砂地の島で、西アフリカのベニン湾に開いているラグーン（潟）のなかにあった（図1）。元々近隣からの漁労の民がここに住みついたと言われている。しかし、19世紀前半には西アフリカでもっとも重要な奴隷貿易の中心地のひとつになった。とくにブラジル北東部バイアへの奴隷輸出が際立っていた。

一方イギリスは、1807年に奴隷貿易を廃止して以降、他国の奴隷貿易を禁止する外交的・軍事的圧力をかけた。イギリスは、フランスをはじめとしてオランダやスペイン、ポルトガル・ブラジルとのあいだに奴隷貿易禁止のための条約を結んだ。これをうしろだてにイギリス海軍は、条約に違反する奴隷船を拿捕し、シエラ・レオネのフリータウンに連行した。ここで合同法廷が開かれ、ほとんどの場合奴隷たちは解放された。しかし、拿捕された奴隷船は氷山の一角であった。すなわち、1808-67年の期間にイギリス海軍は、1600隻以上の奴隷

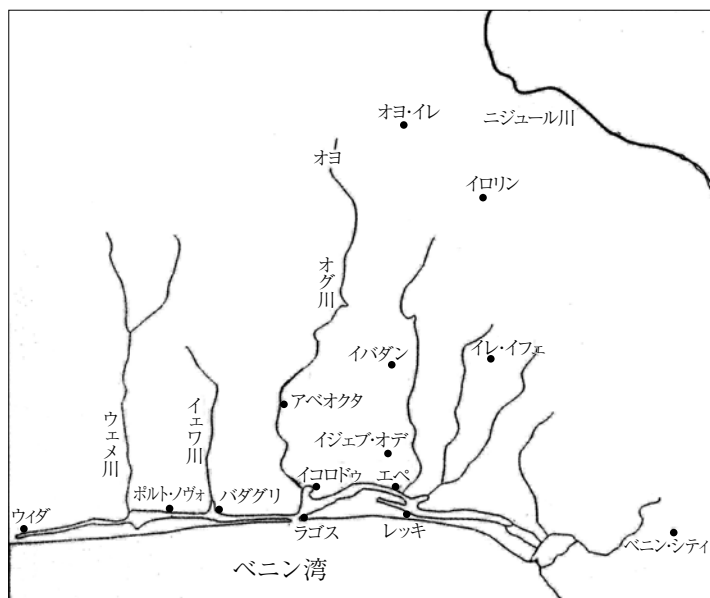


図1 奴隷海岸

船を拿捕し、16万人以上の奴隷を解放したが、同期間に264万人以上の奴隷が運ばれているのである。解放された奴隷は、6%にすぎない<sup>1)</sup>。

1851年、イギリスは奴隷貿易を継続していたラゴスを占拠し、その10年後公式に植民地化した。イギリスの一貫した政策は、奴隷貿易を禁圧し、代わりに合法貿易を推進することであった。ラゴスからの輸出品の中心を占めたのは、パームオイルとパーム核であった。ヤシの木は、西アフリカに自生し、パームオイルは、古くからローカル市場で取引されてきたのである。ラゴスの後背地でヤシの木が植え付けられ、その生産物が取り引きされてきた。

ヨーロッパ市場ではイギリスだけでなく、フランスやドイツ諸地域においてパーム生産物に対する需要が拡大しつつあった。それは、石鹼やろうそく、潤滑油の原料として重要であった。パーム核は、長きにわたって果肉が利用されたあとは捨てられていたが、1870年代になってから核からもオイルが生成できることがわかって、マーガリン生産およびその残りかすは家畜のえさにも使われた。

本稿ではまず第2章で、西アフリカのなかでもラゴスに焦点をあて、大西洋奴隷貿易の歴史のなかで18世紀前半まではほとんどとるに足りない存在でしかなかったラゴスが18世紀終わりから19世紀前半にかけて西アフリカ最大の奴隷輸出港として発展していく過程を明らか

1) R. Burroughs and R. Huzzy, ed., (2015) *The Suppression of the Atlantic Slave Trade : British Policies, Practices and Representations of Naval Coercion*, Manchester Univ. Press, p.8, 布留川正博 (2019) 『奴隷船の世界史』 岩波新書、25ページ。

にする。

19世紀におけるイギリスの対外政策のなかでも最重要課題のひとつが、奴隷貿易の禁圧であった。西アフリカではラゴスとともにその対象にされたのはダホメであった。両者は、イギリスの政策に対抗して奴隷輸出を続けた。いくつかの懐柔策が試みられたが、最終的には武力によって制圧し、奴隷貿易禁止の条約を結ばせた。第3章では、この具体的な過程をみてゆく。

第4章では、合法貿易の目玉であったパーム製品の生産と輸出の実態を明らかにしたい。輸出先は、イギリスをはじめフランスやハンブルクであった。先取りすれば、パーム製品の輸出量は増加していくが、その価格が低下したために輸出額が19世紀終わりには頭打ちになるのである。

最後に、ラゴスでは外国への奴隷貿易が禁止されたものの、内部の奴隷取引や奴隷制は1850年代以降も残ることになる。この問題に対するイギリス政府の政策を明らかにする。

## 2. ラゴスにおける奴隷貿易の進展

D. エルティスとD. リチャードソンらが中心になり、収集・整理した奴隷船の航海データに基づく大西洋奴隷貿易の最新の信頼に足る推算値（表1）によると、1501-1867年のアフリカ沿岸から積み出された奴隷総数は、12,521,332人で、このうちベニン湾から積み出された奴隷数は1,999,060人で、全体の16.0%となる。ちなみに、奴隷積み出し地域として圧倒的に多いのは、アンゴラを中心とする西中央アフリカで（5,694,573人）で、全体の45.5%である。地域別の推算では、ベニン湾は西中央アフリカに次いで第2位に位置している。ベニン湾地域は、別名を奴隷海岸と呼ばれていた。この地域からの奴隷の輸出先の半分以上がブラジル北東部のバイアであった。

ラゴスは、このベニン湾地域の貿易拠点であったが、18世紀前半までは散発的に奴隷を輸

表1 アフリカ各地域からの奴隷輸出数

時期	セネガンビア	シエラレオネ	風上海岸	黄金海岸	ベニン湾	ピアフラ湾	西中央アフリカ	南東アフリカ	計
1501-1600	147,280	1,405	2,482	0	0	8,458	117,878	0	277,503
1601-1700	136,104	6,843	1,350	108,679	269,812	186,322	1,134,807	31,715	1,875,632
1701-1800	363,186	201,985	289,583	1,014,528	1,284,586	904,615	2,365,203	70,931	6,494,617
1801-1867	108,942	178,538	43,453	86,113	444,662	495,165	2,076,685	440,022	3,873,580
1501-1867	755,512	388,771	336,868	1,209,320	1,999,060	1,594,560	5,694,573	542,668	12,521,332

備考：数値の誤りを一部修正した。

出所：D. Eltis & D. Richardson (ed.) (2008), *Extending the Frontiers : Essays on the New Transatlantic Slave Trade Database*, Yale Univ. Press, pp.46-47.

出するにすぎなかった。ベニン湾地域でもっとも多くの奴隷を積み出したのは、ダホメ王国のウィダである。ダホメは、元々内陸の王国であったが、1727年に沿岸部のウィダを征服して以降、奴隷貿易の中心地になった。ウィダ以外にその東方のポルト・ノヴォやバダグリも奴隷輸出港として重要であった。しかし、19世紀に入ると、奴隷積み出し数においてウィダを押さえてラゴスが台頭してくる。19世紀の第2四半期にラゴスは、ベニン湾地域最大の奴隷輸出港になった。これにははどのような事情が関係していたのか。

ひとつ目の理由は、ラゴスの特異な地理的条件である。イギリスが奴隷貿易を禁止した1807年以降、すでに触れたようにイギリスは各国との条約を楯に奴隷貿易を禁圧していこうとした。奴隷貿易は、非合法になったけれども、奴隷貿易業者は、イギリス海軍の監視体制の網の目をかいくぐって奴隷貿易を続けていた。ラゴスは長いラグーン上に位置したため、非合法の奴隷船を見張るイギリス海軍の監視から奴隷の積載をうまく隠すことができた。最盛期には毎年7,000～10,000人の奴隷がラゴスから積み出された。これは、ウィダよりも上回っていた。

アフリカ全体を見ると、奴隷貿易は下火になっていった。ビアフラ湾岸、黄金海岸、風上海岸における奴隷貿易は、19世紀の第1四半期に、そしてセネガンビアは同じく第2四半期に減退していった。しかし、西中央アフリカと東アフリカ、ベニン湾岸は時代の流れに抗して頑強に貿易を続けていた。

ベニン湾岸の奴隷貿易は、歴史的にブラジル北東部のバイアと深くつながっていた。バイアの砂糖産業は、アフリカから大量の奴隷を輸入することによって17世紀に最盛期を迎えたが、その後一時的に衰退した。しかし、1791年に勃発したハイチ革命によって当時世界最大の砂糖生産量を誇っていたハイチの砂糖産業が崩壊し、その穴埋めの役割をキューバとブラジルが果たした。こうして18世紀終わりからバイアのエンジェーニョ（砂糖プランテーション）が拡大した。バイアにおける製糖工場の数は、1758年に180、1798年に260、1820年に340、1834年に583へと増加していった<sup>2)</sup>。そのために新たな奴隷が輸入された。1652-1851年の期間にラゴスから出帆した奴隷船のうち58%が、バイアが出航地であった<sup>3)</sup>。バイアに輸入された奴隷の一部は、1830年代から成長気流に乗ったブラジル南東部のコーヒープランテーションに再輸出された。ただし、奴隷貿易の航海の途中で、イギリス海軍に拿捕された

---

2) Alexandre Viera Ribeiro, (2008) "The Transatlantic Slave Trade to Bahia, 1582-1851," D. Eltis and D. Richardson, ed., *Extending the Frontiers : Essays on the New Transatlantic Slave Trade Database*, Yale Univ. Press, p.138.

3) デイヴィッド・エルティス / デイヴィッド・リチャードソン (2012) 『環大西洋奴隷貿易歴史地図』 増井志津代訳、東洋書林、120ページ (D. Eltis and D. Richardson, *Atlas of the Transatlantic Slave Trade*, Yale Univ. Press)

奴隷船も多かった。1811-30年にバイアから出航したとされる奴隷船のうち85隻が奴隷を積載したあと海上で拿捕され、フリータウンに連行された<sup>4)</sup>。

また、ラゴスの台頭にはベニン湾地域における紛争が関与している。バイアの総督は1807年、次のように述べている<sup>5)</sup>。ラゴス港での貿易の伸長は、ダホメ王ダゴメ（Dagome）とポルト・ノヴォの王とのあいだの戦争の結果である。われわれの船は、奴隷を求めてラゴスに向かわざるをえない。ラゴスは、ダホメの軍隊が到達しうる範囲の外側に位置しており、奴隷海岸東部の沿岸と内陸部をつなぐことのできる戦略的な港であり、この地域ではもっとも安全な地点である、と。具体的には、ダホメの東方への攻撃は、内陸部のオヨ帝国とポルト・ノヴォのあいだの交易ルートを破壊し、オヨの商人は奴隷を連れてラゴスに逃亡したと言われている。

オヨ帝国内の内紛とその崩壊がラゴスの台頭を可能にした。たとえば、オヨ帝国東部のイロリンの首長アフォニアがオヨ帝国に反乱を企て、帝国内の町に攻撃を加えた。こうして、オヨ帝国は、1817年から1836年のあいだの内紛によって最終的に崩壊した。この過程で多くの戦争捕虜が生みだされ、奴隷として売却され、また、多くの戦争避難民が南に逃亡した。混乱に乗じてラゴスの商人は、仲介人として多くの奴隷を内陸部で購入し、ラグーンを通じて港に運ぶことができた。それを外国の奴隷商人に売却した。内陸部における政情不安にもかかわらず、ラゴスの王は秩序を維持し、内陸部の奴隷売却人と外国の奴隷購入者との仲介役を果たした<sup>6)</sup>。

ベニン湾地域では18世紀から奴隷貿易で栄えたダホメ王国は、組織的な軍隊を創建し、内陸部から領土を拡張、ウィダ港を占拠した。ここでヨーロッパの奴隷商人の要望に応じて、奴隷狩り戦争を拡大していった。これに対してラゴス王国は、自ら奴隷狩りの戦争を行うのではなく、内陸部との交渉を通じて安定的な奴隷貿易を拡大し、これによって富を蓄積し、王の権力を強化し、勢力を拡張していった。

### 3. イギリスによる奴隷貿易の禁止

イギリス政府は、奴隷貿易禁止のために1810年代から1830年までフランス、オランダ、スペイン、ポルトガル・ブラジルなどとのあいだで条約を締結し、これを楯に各国の非合法の

---

4) A. V. Ribeiro, *op.cit.*, p.146.

5) Kristen Mann, (2007) *Slavery and the Birth of an African City : Lagos, 1760-1900*, Indiana Univ. Press, p41.

6) *Ibid.*, PP.41-42.

奴隷貿易活動を制圧しようとした<sup>7)</sup>。この活動の重点が需要サイドから供給サイドに移ったとき、アフリカ諸国の主権の問題が浮上してきた。すなわち、奴隷貿易禁止の条約締結は、ヨーロッパ諸国とのあいだだけでなく、アフリカの様々な王国や首長とのあいだでも結ぶ必要があった。さらに、奴隷貿易に代わる新たな貿易の形態、合法貿易の具体的なあり方を見い出さなければならなかった。

奴隷貿易禁止と合法貿易のスローガンはすでに、奴隷貿易廃止運動のなかで提起されてきたが、これをイギリスのアフリカ政策の基本に位置付けたのが、第2世代の有力なアボリショニストのひとりであったバクストン（Thomas Fowell Buxton）である。彼が中心になり、1838年にアフリカ文明化協会（The Society for the Extinction of the Slave Trade and the Civilization of Africa）が結成された<sup>8)</sup>。この組織の目的は、奴隷貿易を廃止し、現地の人々のあいだにキリスト教を広め、合法貿易を推進することであった。この組織には多くの重要人物が会員または理事に登録されていた。会員として、4人の大主教、18人の主教、5人の公爵、8人の侯爵、15人の伯爵が含まれており、また、理事には13人の上院議員と20人の下院議員が就任した。イギリスの諸都市および海外植民地に多くの支部が創設された。たとえば、ヨーク、ダーラム、ニューカスル、プリマス、エクセター、ブリストル、オクスフォードなどの都市に、また、ジャマイカやアンティグアに支部が組織された。かなり大掛かりな組織であったことがわかる。

バクストンは、アフリカを文明化するうえでもっとも障害になっているのは奴隷貿易だと考えていた。アフリカの沿岸でのイギリス海軍の勢力が強化されてきたにもかかわらず、奴隷貿易の規模は、イギリス海軍がその活動を始めたころよりも1838年の方が大きくなっており、バクストンは危機感を強めていた。実際、ブラジルの奴隷輸入は、1830年の条約締結以降いったん下火になったが、1830年代後半になると一挙に増加した。ブラジル南東部のリオ・デ・ジャネイロやサン・パウロなどでコーヒープランテーション（ファゼンダ）が急激に拡大し、それに伴って奴隷の需要が急増したのである。

バクストンは、この状況を打開するためにイギリス海軍を増強し、そのために船はすべて蒸気船にすべきだと提言した。また、西アフリカの各地にイギリスの代理人を配置し、現地支配者を懐柔し、奴隷貿易廃止の条約を締結すべきだと考えた。さらに、奴隷貿易に代わる合法貿易を推進するために農業のモデル拠点を創設し、適切な輸出商品を生み出すことが重

---

7) 布留川正博（2020）『イギリスにおける奴隷貿易と奴隷制の廃止——環大西洋世界のなかで』有斐閣、101-103ページ。

8) 布留川正博（2006）「イギリスのアボリショニズムとシエラ・レオネ植民地」『経済学論叢』（同志社大学）第57巻第4号、100-101ページ。

要である、と主張した。

1840年6月、アフリカ文明協会の総会が開かれ、具体的な活動計画が議論された。そして、1841年8月に周到に準備された探検隊がニジェール川流域に派遣された。145人のヨーロッパ人を乗せた3隻の蒸気船である。しかし、探検隊は災難に見舞われ、マラリアが探検隊の三分の一の命を奪った。残された者だけで探検を続けることが不可能になった。ニジェール川とベヌエ川との合流地点にモデル農場を作る計画も実行できなかった。1842年になってこの計画は突然停止された<sup>9)</sup>。

バクストンが進めようとした計画がなぜ失敗したのか、をめぐって1842年に下院特別委員会で議論された。重要な証言が、ニジェール地域における初期の事業家であったレアード (MacGregor Laird) によってなされた。彼は、バクストンの計画目標については賛成であったが、その方法に対して異議をとらえた。彼は、自身の経験からニジェール地域ではヨーロッパ人はほとんど生き延びることができない、と主張した。その代わりに現地人の代理人を養成することが重要である、とした。しかも、その人数は何千人も必要である、と強調した。現地人の代理人をどのように調達したのか、についてはあとで述べることにする。

バクストンの計画は失敗したが、奴隷貿易禁止がイギリスの対アフリカ政策の根幹であり、アフリカの沿岸や河口にまで進出して、奴隷船を拿捕する具体的な方策がイギリス政府内で練られていた。しかし、この方策が実行されると、アフリカ当該国の領海内（3マイル）にイギリスの軍艦が入ることになり、主権を侵すことになると懸念された。実際、1838年、外務大臣パーマストン (Henry John Temple Palmerston) は、上記のような行動がとれるかどうかを法務専門家に相談している<sup>10)</sup>。ネックとなるのは、現地の王や首長とあいだで奴隷貿易禁止のための条約を結べるかどうか、また、その条約のなかに奴隷貿易制圧のために領海内にイギリス海軍が入れるかどうか、であった。

こうした方向でのイギリス海軍の最初の試みが1840年、シエラ・レオネ南東部のガリナス川流域でおこった。ここにはスペイン人の奴隷貿易活動の拠点があった。現地王シアッカとその息子は奴隷貿易活動を保護していた。イギリス海軍のデンマン (Joseph Denman) 艦長は、奴隷貿易を防ぐためにその川を封鎖した。シアッカ王は、イギリス海軍の領海侵犯が国際法違反であるとする手紙をシエラ・レオネ総督に送付した<sup>11)</sup>。

この年の11月、シエラ・レオネ総督は、デンマンにイギリス臣民（シエラ・レオネの解放

9) 同上、101ページ。

10) Robin Law, (2010) "Abolition and Imperialism : International Law and the British Suppression of the Atlantic Slave Trade," D. R. Peterson, ed., *Abolitionism and Imperialism in Britain, Africa and the Atlantic*, Ohio Univ. Press, p.152.

11) 布留川正博 (2020) 「奴隷貿易禁止とアフリカ分割への道」『歴史評論』No.846、51ページ。

アフリカ人) がガリナスで奴隷として囚われており、彼らを、もし必要なら武力を用いて、解放してもらいたいと依頼した。デンマンは、ガリナス川にイギリス海軍を派遣し、スペインの奴隷商人所有の船を拿捕し、800人余りの奴隷を解放した。その後デンマンは、シアッカ王に対して奴隷貿易禁止条約を結ぶように迫った。王は最初、条約締結を拒否したが、最終的にこれを受け入れた。そして、ガリナス川の奴隷収容所が破壊され、奴隷商人が排除された。デンマンの行動は、イギリス政府に認められ、とりわけ、パーマストン外相に称賛された<sup>12)</sup>。

しかし、奴隷商人の巻き返しがすぐに起こった。1840年代半ばまでに彼らはガリナス川流域に居住し、活動を再開させた。シアッカ王はこれを許容した。イギリス政府はこれに抗議したが、王は、条約は強制的に署名させられたがゆえに無効である、と反論した。また、デンマンは、スペインの奴隷商人によって、彼らの財産がデンマンによって破壊されたとして、告訴された。判決は、デンマンの行為の合法性を認めるものではなかった。しかし結局、1849年にイギリス海軍が再度ガリナス川に侵入し、奴隷収容所を破壊し、沿岸を封鎖した。この軍事的圧力によってシアッカ王は、1850年2月、奴隷貿易禁止の条約を最終的に受け入れた。

次に、ラゴスの場合である。1840年代から50年代にかけて、ウィダの東に位置するラゴスで政変があった。1845年、アキトイエ王は甥にあたるコソコによって政権の座を奪われた。アキトイエは、ラゴスの西にあるバダグリに避難した。この町にはシエラ・レオネで解放されたヨルバ人が帰還し、居住していた。彼らは、イギリス伝道教会（CMS）の影響下にあり、イギリス臣民と認められていた。アキトイエの動向やバダグリの情勢は、イギリス伝道教会から本国にもたらされた。ラゴスの北方、オグ川の流域にあるアベオクタもバダグリと同様、イギリス伝道教会の影響下でシエラ・レオネからのヨルバ人が居住していた。

パーマストンは、1850年2月25日付けの、ベニン湾およびビアフラ湾地域のイギリス公使であったビークロフト（John Beecroft）への手紙のなかで、バダグリやアベオクタの状況について次のように述べている<sup>13)</sup>。

「アベオクタは、ヨルバ人の町で、人口は5万人を超えている。この町は、ラゴスの北方、オグ川の東岸にあり、オグ川はラゴスに注いでいる。したがって、ラゴスは、アベオクタの自然の港になりえるのであるが、ラゴスでは奴隷貿易が盛んなので、ヨルバ人はそれを避けてバダグリ港を利用せざるをえない。アベオクタとバダグリは、陸路で繋がっているが、難

---

12) Law, *op. cit.*, p.155.

13) Papers Relative to the Reduction of Lagos by Her Majesty's Forces on the West Coast of Africa (1852), *British Parliamentary Papers (BPP)*, Vol. 54, No.4.



路である。また、ヨルバ人は、ダホメ王の奴隷狩りのための遠征で被害を受けており、アベオクタもその標的にされたことがある。アベオクタの人々は、奴隷貿易が完全に廃止されることを強く望んでいる。

アベオクタとバダグリは、シエラ・レオネと貿易をしており、また、シエラ・レオネから移民を受け入れている。その移民たちが、バダグリで多くの船を所有していて、貿易活動を行っている。さらに、バダグリは、ロンドンとのあいだでも貿易を行っている。イギリスから派遣された伝道教会の活動もバダグリとアベオクタで活発である。

あなた（ピークロフト＝筆者）は、適当な時期にアベオクタを訪問し、その町を調査し、人々の望みを探り、ヨルバ人の性向を確認すべきである。また、この町だけでなく、周辺地域の首長たちとも交流し、彼らの感情や意志を確かめる必要がある。なぜなら、イギリスは、奴隷貿易廃止と合法的かつ平和的な貿易を望んでおり、ヨーロッパの商品と現地の自然資源を交換することによって、現地の繁栄や幸福を増進することを願っている。」

すなわち、シエラ・レオネ、バダグリ、アベオクタは密接な関係にあり、この3地域にはイギリスの奴隷貿易禁止政策に協力する力強い勢力が存在するとパーマストンはみなしていた。そして、ラゴスの王も奴隷貿易禁止の条約に同意すれば、バクストンのニジェール川流域への探検によって提起された課題が達成されるであろうと期待した。

バダグリに避難していたアキトイエは、イギリスの力を借り、ラゴスの王に復帰したいと考えていた。現地の伝道教会は、イギリスとのあいだに奴隷貿易禁止の条約を結ぶ姿勢を示していたアキトイエを支援すべきだと本国政府に提案している。ただし、イギリス政府は、現在の王コソコに対しても奴隷貿易禁止の条約を結ぶように迫っていた。

パーマストンからピークロフトへの1851年2月20日の手紙のなかで、次のように述べられている<sup>14)</sup>。

「1850年4月22日付けの手紙で、私は、ラゴスの首長（コソコ＝筆者）に奴隷貿易廃止のための条約を結ぶように促してほしいと述べたが、これについてその後どうなったかは聞いていない。あなたには、ファンショー提督とともに条約締結のために努力してもらいたい。」

この手紙のなかには、条約の内容を記した文書が含まれていた。以下の通りである。

「第1条 外国への奴隷輸出は、ラゴス首長の領域内で永久に廃止される。

第2条 奴隷取引を行うヨーロッパ人およびその他の人々のラゴス領内での居住を許さない。奴隷貿易のための家屋、収容所、その他の建物の建築を許さない。

第3条 ラゴス領内で奴隷貿易が行われていることが明らかになれば、イギリス軍を使っ

---

14) Ibid, No.23.

て止めさせる。

第4条 輸出のための奴隷が見つければ、引き渡され、シエラ・レオネにおいて解放される。

第5条 奴隷貿易を行っていたヨーロッパ人およびその他の人々は、この国から排除される。家屋、収容所、建物は、3ヵ月以内に合法的目的に使用しなければ、破壊される。

第6条 イギリス臣民は、いつでもラゴスの人々と自由に貿易することができる。

第7条 フランス共和国大統領がこの条約の仲間に入りたいと望むならば、同様の効力が保持される。」

この手紙の追加事項と思われる手紙が、パーマストンからピークロフトへ1851年2月21日付けで送付されている。その内容の中心は、ラゴス王とのあいだで奴隷貿易廃止のための条約を結ぶ権限をピークロフトに与える、というものである。さらに、次のように述べている<sup>15)</sup>。

「イギリスは、アフリカの奴隷貿易を禁止する決意をした。そして、そのための手段と力を大西洋の両側でもっている。スペイン政府とブラジル政府に対して、キューバとブラジルへの奴隷輸入を禁止するように促した。こうして、奴隷に対する需要が著しく減少した。またイギリス政府はこれまでアフリカ西海岸の現地首長とのあいだで奴隷貿易禁止のための条約を結んできた。奴隷貿易の代わりに合法貿易を推進する方が得策であることを強調すべきである。

イギリスは、海上でも陸上でも大きな力をもっている。我々と友好関係を結ぶのが得策だ。これを拒否すると、イギリス政府の不興をかうだろう。」

これはまさにイギリス政府とその指揮下にある軍隊の強さを誇る文言であり、奴隷貿易廃止に従わない首長は暴力的に制圧されることを暗示する脅迫言説である。

さて、イギリス伝道教会のゴールマー尊師からヴェン尊師への1851年1月3日付けの手紙、および、ゴールマー尊師からトロッター船長あての、同年1月13日付けの手紙のなかで、バダグリの様子が伝えられている<sup>16)</sup>。

「我々の町は、最近2回にわたってラゴスの人々によって焼かれる寸前であった。我々は、急襲によって破壊されるのではないかと恐れている。そんななか1月2日にピークロフト公使がようやくここに到着した。彼は、1月7日からヴァン・クーテンとともにアベオクタに出かけて、無事戻ってきた。ベニン湾地域ではラゴスが奴隷貿易の中心になっているが、奴隷貿易業者は望み通りには奴隷が売れないようだ。最近の話では、135人の奴隷を確保して

---

15) Ibid, No.25.

16) Ibid, No.31.

いたが、7人が売れただけで、これはアベオクタの奴隷商人をひどく怒らせた。彼は、我々の友人たちを殺すぞと脅した。」

ピークロフトは、奴隷貿易禁止条約締結に前向きなアキトイエに好感をもっていた。アキトイエの望みは、イギリスの支援を受けて再びラゴスの首長に復帰し、奴隷貿易禁止の条約を結ぶことであった。

1月13日付けの手紙には、アキトイエからピークロフトへの手紙が同封されていた<sup>17)</sup>。そこにはアキトイエとコソコとの関係が記されている。

「約9年前（1842年—筆者）、前の王（オルウォレ）がなくなり、私はラゴスの人々によって王に選ばれ、ベニン王にも承認された。統治の3年後、ラゴスにイギリス人を招こうと考えた。私は、奴隷貿易を廃止し、合法貿易を実行に移す決意を固めた。しかし、1845年、コソコは、多くの不埒な少年たちを集めて、私に戦いを仕掛けてきた。戦闘は21日間続き、千人以上の命が失われた。私は、ラゴスから離れなければならなかった。こうして、コソコが王位に就いたものの、ベニン王がこれを認めたわけではなかった。私は、ラゴスからアベオクタに逃れ、さらに、コソコの動静を窺うためにバダグリに来た。あなたの支援を期待している。私が王位に返り咲いた際には、奴隷貿易を廃止する条約を結び、合法貿易を行いたい。」

ところが、1851年6月下旬から7月初めにかけてコソコの戦闘員がバダグリを襲うという事件が起こった。その詳細は、バダグリの住民からジョーンズ船長への1851年7月11日付けの手紙に記されている<sup>18)</sup>。

「6月21日、多くのカヌーがコソコの戦闘員を乗せて東方からやってきた。陸路からも攻撃を仕掛けるつもりでやってきた。しかし、反撃を加えて、撤退させた。

6月22日、激しい戦いがアジド（バダグリから東に約10マイルの町）で起こった。街は火を放たれ、破壊された。

6月23日、多くのカヌーが再びやってきた。クルー人の少年が誘拐された。

7月2日（夜）、イギリス人のギーという人物とクルー人が海岸で撃たれて、死亡した。

7月7日、約100隻のカヌーにそれぞれ10~20人のコソコの戦闘員を乗せて、攻めてきた。船の上から旋回砲で射撃し、威嚇する者もいた。上陸しようとしたが、撃退された。この時点で、敵の軍隊はすべてアジドの町に集合し、次の攻撃を準備している。」

この手紙はすぐさまジョーンズ船長に送られ、彼から7月18日付けで返信されている<sup>19)</sup>。

「こうした暴力行為は、イギリス臣民に向けた所業だとは認められない。死亡者が出たと

---

17) Ibid.

18) Ibid., No.41.

19) Ibid.

しても、それは偶発的事件にすぎない。軍事的干渉はまだ要請されていない。イギリス臣民は、現地人たちの紛争に巻き込まれないために中立を守る。」

実は、ジョーンズ船長は、これと並行してコソコに6月20日付の手紙を送っている<sup>20)</sup>。

「私は、ラゴスの住民とバダグリの住民とのあいだで起こった争いを非常に遺憾に思う。この紛争の結果、イギリス商人と両者の住民とのあいだの貿易が混乱し、住民の財産が損害を被った。私は、紛争を望まない。両者とも平和に共存してもらいたい。もし、これと反対のことが起これば、コソコはイギリスの力を認識していると思うが、イギリス国旗がなびいている家々を守るために命令を出すことになる。」

一方、アキトイエ側の副王とみなされるショロンからジョーンズ船長に7月3日付でバダグリから手紙が送られている<sup>21)</sup>。

「コソコによって正当な王アキトイエが追放されたことは、あなたもご承知のことと存じます。アキトイエを支援していただきたい。コソコが彼を殺そうとすることを思いとどまっているわけではないのです。コソコは近隣の様々な部族に対して影響力を保持しており、最近ダホメの人々をけしかけて、アベオクタに戦闘を仕掛け、多くの命が失われたのです。それから20日がたつて、コソコの戦闘員たちがバダグリでアキトイエ側の人々を殺したのです。コソコは、アベオクタとイギリス両方の敵です。彼は、バダグリとアベオクタに攻め込むためさらに大きな軍隊を作ろうとしているのです。コソコと奴隷の町ラゴスを倒すためにイギリスの援助を要請します。アキトイエが復権すれば、私たちの恐れはなくなるのです。女王陛下がこの町の所有権を確立することを要請します。」

しかし、これに対する7月18日付のジョーンズ船長の返信は冷ややかなものであった<sup>22)</sup>。

「自分たちの力を結集して、戦ってもらいたい。イギリス臣民が守られ、苦しめられていない限り、地域的問題に介入するつもりはない。」

次に示すのは、現地の伝道協会からパーマストーンへの8月20日付の手紙である<sup>23)</sup>。

「クロウザー尊師（Rev. Samuel Crowther）が提供する奴隷貿易に関する情報は、我々にとって重要な情報である。それによると、ブラジルの奴隷貿易業者は、イギリスとともに奴隷貿易を制圧し、合法貿易を導入しようとする首長や部族を押しつぶそうとしている。最近のアベオクタへの遠征は、ダホメとともにラゴス、バダグリ、ポルト・ノヴォ、ウィダの首長たちが事前に打ち合わせた計画を実行したものである。

---

20) Ibid.

21) Ibid.

22) Ibid.

23) Ibid., No.42.

（これに対して）ヨルバ人は、イギリスの利害に結びついた卓越した存在であり、シエラ・レオネからの解放アフリカ人のなかで大きな人口を形成している。彼らは、奴隷貿易業者が奥地で奴隷を獲得するうえでの障害となっている。」

さらに、クロウザーは、次のように述べている。

「1. 多くの現地人は、イギリスの多大なる努力によって、奴隷から解放され、シエラ・レオネでイギリス臣民となり、アベオクタに帰ってきた。

2. この前のピークロフトのアベオクタへの訪問は、イギリスの利害の確認とダホメの侵略への抵抗に寄与した。

3. 解放アフリカ人は、イギリスの保護下であり、もし、彼らがダホメ王によって苦しめられたら、ウィダの港は封鎖される。

こうした警告にもかかわらず、ダホメ王はアベオクタを攻撃した。この戦争の際、アベオクタの首長はシエラ・レオネ総督からマスケット銃の弾丸を受けとった。シエラ・レオネで砲兵隊として訓練を受けたヨルバ人が帰ってきたら、次の攻撃に対して対抗することができるであろう。

ラゴスの合法的な王は、アキトイエであり、今はピークロフトと一緒にいる。コソコは、ブラジルの奴隷貿易業者の単なる道具で、ダホメやアシャンテその他の王に賄賂を贈っている。もし、ラゴスが合法的な王の支配下になれば、イギリスと同盟を結び、綿花に富む国となろう。沿岸からニジェール川流域に広がり、200～300マイルまで達するであろう。」

次に示すのは、パーマストンから海軍本部長への9月7日付けの手紙である<sup>24)</sup>。西アフリカのこれまでの全般的な状況を把握し、明確な方針を打ち出している。

「政府は、アフリカ西海岸における奴隷貿易の状況について注意深く見守ってきた。この海賊の行為を制圧するために我が艦隊が活動してきたことを心安らかに見ている。現地の首長とのあいだで奴隷貿易禁止のための条約が増加してきており、昨年はガリナスでの作戦が赤道以北の海岸から奴隷貿易を根こそぎにした。しかし、いまだにふたりの敵対者がいる。ダホメ王とラゴスの首長である。

政府はこれまでダホメに対して奴隷貿易を廃止するように促す使節団を2回送った。これによって生じる損害に対する金銭的補償をし、好ましい贈物もしようとして申し出た。こうした申し入れに対して、ダホメ王は聞く耳をもたなかったどころか、奴隷狩りの準備をしたのである。

オグ川流域にあるアベオクタの町は、ラゴスから60マイルの位置にあり、シエラ・レオネから多くの解放アフリカ人が送り込まれた。この町は、キリスト教化と文明化のセンターと

24) Ibid., No.43.

なり、それが周囲に影響を与えている。

現地に派遣されているイギリスの役人は、ダホメ王が奴隷狩りの一団をアベオクタに派遣するつもりだ、ということを知った。ダホメ王に対して、イギリス政府の名のもとで、このような攻撃をしないように要請した。もし、アベオクタが攻撃されたら、ウィダを封鎖する、と手紙で伝えた。こうした警告にもかかわらず、ダホメの軍隊は、昨年春行軍した。しかし、これに対しては撃退した。

私は、ウィダおよび残りの海岸は厳しく封鎖されるべきである、と表明する。この封鎖は、ダホメ王が奴隷貿易を完全に停止し、ダホメの住民がその犯罪に手を染めるのをやめ、外国の奴隷貿易業者を追いつくことに同意し、署名するまで、解かれることはない。もはや金銭的補償は与えられない。主要な収入源は、貿易から得られる。

ラゴス王は、ここを拠点とする奴隷貿易業者に支持された野蛮人である。ラゴス王は、ダホメ王を勇気づけている。彼は、伝道教会の活動と奴隷貿易廃止を結びつけて考えているので、伝道教会を台無しにすることによって奴隷貿易廃止を妨害しようとしている。ラゴスに小規模の軍隊を派遣することには何ら難しいことはない。そして、前王アクトイエを復権させる。もっとも望ましいのは、現在の王を排除し、アクトイエを復位させ、奴隷貿易廃止の条約を結ぶことである。」

さて、次の手紙は、ピークロフトからパーマストーンへの11月26日付のもので、ピークロフトがラゴス王コソコと接触した経緯が明らかにされている<sup>25)</sup>。ピークロフトは、ラゴス沖でブラッドハウンド号に乗船している。

「私は、11月10日、この蒸気船にアクトイエ王と彼の随員とともに乗り込んだ。13日にラゴス沖に到着し、ウィルモト司令官と連絡をとった。彼は、オグ川に入り、コソコ王を訪問したという。コソコ王は、もし奴隷貿易廃止の提案がされたら、それに同意する、と言った。彼と交渉ができるかもしれない、とも言った。同日夜、ガードナー司令官が到着した。

11月14日、11時に船の錨を上げ、バダグリ沖に午後4時に錨を下ろした。11月15日10時にバダグリに上陸、ペイティ少佐とアクトイエ王を伴って小さな会合を開いた。これにはラゴスに関係する首長も参加した。

11月17日までにマスケット銃と火打石を荷揚げした。18日午後9時までに10隻の船がラゴスに向け出航できる準備が整った。20日の6時半ころ、ハーレクイン号は10隻の船とともに、休戦の旗を掲げて出航した。オグ川の東側の入り江に上陸すると、そこにはブラジル人のマルコスとノブレの小屋があった。しばらくしてコソコの使者が到着した。彼らは、10隻

---

25) Ibid., No.55.

の船が入ってきたら、攻撃を受けることになるかもしれないので、1隻の船なら受け入れる、と言った。私は彼らに、1隻の船ではすべての事務官を乗せることができないので、2隻は必要である、と言った。私と先述のマルコスが同じ船に、ウィルモト、ガードナー、ベイティと通訳がもうひとつの船に乗った。私たちは、1時間20分くらいで町に着いた。

私たちは、マルコスの家に案内され、2時間待たされた。コソコ王が武装した男たちとともに現れた。コソコ王の領域内で外国の奴隷貿易を全面的に禁止することを王は望んでいるのか。コソコの答えは、自分は支配者ではなく、この領域はベニン王の支配下にあるということであった。私がベニン王に会って、彼に仲裁をしてもらおう、と言ったが、コソコは、ベニン王からラゴス王として認められていないから、自分には条約を結ぶ権限がない、と言った。したがって、コソコ王は条約を結ばない、結びたくない、と言った。」

こうして奴隷貿易廃止の条約を結ぶ交渉は、物別れとなった。その結果、イギリスは、武力的介入を決意した。1851年11月25日、イギリス海軍の攻撃が開始されたが、コソコ王側の軍隊に追い返された。このときの戦闘でイギリス側は、2人が死亡し、10人が負傷した、と報告されている。1カ月後の12月26日に再度攻撃が開始され、今回はイギリス側が勝利した。これによってコソコ王は排除され、アキトイエが王位に復帰した。1852年1月1日、アキトイエ王とのあいだで奴隷貿易禁止の条約が結ばれた。

イギリス政府内には、ラゴスへの武力介入というパーマストンの決定に反対する、初代海軍省長官であったフランシス・ベアリング（Francis Baring）などもいたが、時のジョン・ラッセル（John Russell）首相は、実質的にこの介入を黙認した。

こうして、ラゴスの場合は、イギリス政府およびイギリス海軍の直接的な軍事介入によって王を交代させ、復帰した王とのあいだに奴隷貿易禁止の条約を結んだのであるが、もうひとつの奴隷貿易の拠点であったウィダ（ダホメ）はどうなったのか、結果だけを簡単に触れておきたい<sup>26)</sup>。

ダホメは1851年3月、アベオクタを攻撃するために軍隊を送ったけれども、反撃を被り、帰還せざるをえなかった。これより少し前、イギリスの西アフリカ海軍司令長官ファンショー（Arthur Fanshawe）は、ダホメのゲズ王にアベオクタに攻撃を仕掛けないように警告していた。なぜなら、アベオクタには、すでに触れたように、シエラ・レオネから帰還したイギリス臣民やイギリス伝道教会の人びとが居住していたからであった。ファンショーは、イギリス臣民に危害を加えた場合には、ダホメの領海内に侵入し、ウィダを封鎖し、すべての貿易を停止させる、と警告していたのである。

ダホメとイギリスとのあいだには緊張状態が続いていたが、1851年9月の段階でパーマス

---

26) 布留川正博「奴隷貿易禁止とアフリカ分割への道」52-53ページ。

トンは、奴隷貿易を廃止するためにはウィダを武力によって封鎖するしかない、との結論を下した。同年12月、海軍司令長官ブルース（Henry William Bruce）は、ウィダ封鎖を命令し、翌年1月に実行することになった。こうした圧力のもとで、ゲゾ王は、奴隷貿易廃止の条約を結ぶことに同意した。ただし、イギリス側が望むような条約内容ではなく、ダホメから奴隷を輸出することを禁じる単一条項の条約にサインしたのである。これには外国人の奴隷貿易業者の排除や収容所の破壊の内容は入っていたけれども、奴隷貿易の復活を制圧するためのイギリス海軍の介入の条項は入っていなかった。ゲゾ王は逆に、この条約締結を楯にとって、ウィダの錨地からイギリス海軍が引き揚げることを要求した。これに応じてイギリス海軍は1852年6月、ウィダの封鎖を解除せざるをえなかった。

ダホメ側は一定の譲歩はしたが、イギリス海軍の直接的監視から距離をとることができた。ダホメからの奴隷輸出は、1860年代になっても続いていたのである。

#### 4. 合法貿易の始動

奴隷貿易廃止以降、ベニン湾地域で合法貿易の目玉と当初見込まれていていたのは、綿花である。ヨルバ人たちは、それ以前から長らく綿花を栽培し、綿織物を生産していたからである<sup>27)</sup>。1850年代に現地のキリスト教伝道教会やイギリスのキャンベル公使らはこの計画を支持し、実行に移していった。実際、1850年代の終わりから60年代前半にかけて綿花生産と輸出が拡大していった。これには1860年代前半におけるアメリカ合衆国での南北戦争のために綿花生産が激減し、その価格が上昇し、ベニン湾地域とくにアベオクタやイバダン周辺で綿花生産が伸びたのである。1860年代にラゴス港から年平均約60万ポンドの綿花が輸出された。しかし、南北戦争が終わり、アメリカ南部での綿花生産が回復するにつれて、価格が低下し、綿花では稼げなくなった。

綿花に代わって浮上してきたのが、パームオイルである。ベニン湾から奥地に20～150マイルの森にはアブラヤシが自生していた。その地域に住む人々は、何世紀も前からパームオイルを製造してきた。食用オイルやランプの燃料として使われてきたのである。奴隷貿易の時代にもパームオイルを奴隷船に売っていた。リヴァプールとブリストルの奴隷貿易業者は、奴隷貿易廃止への圧力が日増しに高まるにつれて、奴隷に代わる商品を探していた。そしてついにパームオイルに辿りついたのである。1809年に時点でパームオイルを取引するリヴァプールの17のアフリカ貿易業者を調べると、彼らはすべて元奴隷貿易業者であった<sup>28)</sup>。

27) Mann, *op. cit.*, p.117.

28) *Ibid.*, p.117.



ベニン湾地域のなかでもラゴスの内陸部で生産されるパームオイルは、もっともランクの高い品質であったと言われる。パームオイルは、食用や燃料としてだけでなく、潤滑油や融剤として、また、石鹼製造やろうそく加工などにも使用された。19世紀初めから1840年頃までベニン湾地域で商売をする一握りのリヴァプール商人がヨーロッパへのパームオイル輸出を支配していた。それにブリストルやロンドンの商人も加わった。1830年代終わりから40年代初めにかけて、イギリス商人は、パームオイル貿易がかなり儲かるものと考えていた。実はこの頃、ブラジルの大物の奴隷貿易業者も奴隷だけでなく、パームオイルも購入して、ブラジルに輸入し、その一部をイギリスに再輸出していた。

パームオイルの市場は、イギリスだけでなく、ハンブルクを通じてドイツへ、またフランスにも広がっていた。イギリス市場のシェアは、1853-62年には64%であったが、その後の20年間に約50%に下がっている<sup>29)</sup>。イギリスと大陸ヨーロッパのパームオイルの消費量（輸入量）は、1854年には約36,600トン（価格は、175万6千ポンド）であったが、その後の成長はゆっくりで、輸入量は年間38,000~49,000トン程度であった。ちなみに、パームオイルの価格は、大不況をはさんで、1855-59年に42.83ポンド/トンから1885-89年に21.66ポンド/トンに下がっている<sup>30)</sup>。

1852年初めから様々な商人がラゴスを訪れ、パームオイルの貿易業に参画した。スコットランド人のマッコスクリー（William McCoskry）がラゴスにやってきて、イギリスのハトン（W. B. Hutton）商会の代理人として活動した。つづいて、サンドマン（J. G. Sandeman）は、スチュアート・ダグラス商会の代理人としてラゴスにやってきた。同年3月には、ドイツ人ディーデリッヒセン（Lorenz Diederichsen）がラゴスを訪れて、翌年ハンブルクのウィリアム・オズワルド商会の代理店を開設させた。また、ロンドンのバナー・ブラザーズ商会やマルセイユのヴィクター・レジス商会などもパームオイルの貿易を開始した。ちなみに、ウィリアム・オズワルド商会とヴィクター・レジス商会は、前王コソコと商業関係を結んでいた。コソコも奴隷貿易からパームオイル貿易へと転換したのである。1850年代の終わりまでに、ラゴスは、パームオイル貿易においてウィダやポルト・ノヴォ、バダグリにとって代わったのである。それゆえ、ラゴスは西アフリカのリヴァプールと言われるようになった<sup>31)</sup>。

パームオイルの製造過程は、次の通りである。

ヤシの実は、12月の終わりから5月の初めにかけて熟れてくる。ヤシの実を数日間発酵させ、これを木片、灰、水を底に詰めた壺のなかに入れ、熱を加えて沸騰させる。これを取り

29) Ibid., p.121.

30) Ibid., p.120.

31) Ibid., pp.121-122.

出し、粉碎器に入れ、足で踏みつけ、どろどろにしたあと水を加えると、油分を含んだ繊維状のものが表面に浮かんでくる。これを取り出し、さらにいくつかの工程を経て、油分を抽出するのである。パームオイルを生産する工程は、8～14時間かかるといわれ、労働集約的な産業であった。1890年代の推算では、1500万本のヤシの木から10万～15万トンのヤシの実が得られ、そこから1万トンのパームオイルが生産できた<sup>32)</sup>。

ところで、ヤシの実のうち種子（核）の部分は、1870年代まではほとんど捨てられていた。しかし、核にも油分が含まれていることがわかり、これを用いて石鹸やマーガリンを製造した。イギリスのパーム核の輸入量は、1855年に約600トンであったが、1884年には約43,400トンに増加している。ハンブルクへのパーム核の輸入量も1875年に約6,500トンであったが、1890年には約52,400トンに増加している。

パームオイルの生産は、基本的に女性の仕事だと考えられていた。小規模な生産の場合、家族のなかでは妻が主導権を握って生産に携わり、子どもたちがそれを手伝った。収穫の際には臨時的移動労働者を使役することもあった。また、有力な首長が組織するパームオイル生産には多くの奴隷が使役された。外国への奴隷輸出は禁止されたが、奴隷を生み出す構造にはほとんど手が付けられず、それが奴隷の供給を容易にした。地域の有力者は、奴隷貿易からの収入を失ったが、奴隷労働によるパームオイルの生産と輸出によって収入を得た。ある記録によると、バダグリの首長は、30人の女性奴隷と多くの男性奴隷を所有し、パームオイル生産に使役した、とされている<sup>33)</sup>。

ラゴスにおけるパームオイル貿易が拡大した時期は、シエラ・レオネから多くの移民がラゴスにやってきた時期と重なる。彼らのほとんどは、ヨルバ人であり、いくばくかの資本を所有し、それをパームオイル貿易に投資した。J. P. L. デイヴィスもそのひとりであった。彼は、シエラ・レオネのグラマー・スクールで学んだあと、兄弟とともにラゴスにやってきた。商船の船長としてフリータウンとニジェールデルタとのあいだを行き来した。その後、彼は、2隻の奴隷船を購入し、パームオイル貿易用に改修した。デイヴィスは、ラゴスに居住していた1856年、本社がロンドンの西インド商会（West Indian Mercantile Firm）の代理人になった。この商会は、主として綿花とパームオイルの貿易を行った。次の数年のあいだに彼は、ラゴスでもっとも成功を取めたシエラ・レオネ出身の商人となった。サラ・デイヴィスは、彼の2番目の妻であったが、彼女とクロウザー（Samuel Crowther）尊師は、イギリス海軍がラゴスの反乱の際にコソコを撤退させる命令書を持っていたふたりのアフリカ人であった。イギリス政府側とのこうした人的コネクションもあり、デイヴィスはラゴス在

32) Ibid., p.131.

33) Ibid., p.135.

住の商人として成功を収めたのである<sup>34)</sup>。

ラゴスからのパームオイルの輸出量は、1856-60年には年平均3,984トン、1866-70年には同5,697トン、1876-80年には同7,202トンと着実に増加している。また、パーム核の輸出量は、1866-70年に年平均で14,524トン、1876-80年に同29,350トンとこちらも増加している。イギリスのシェアに注目すると、パームオイルは1870-85年の時期に55~60%であり、パーム核は1870年の63%から1885年の48%に落ちている。ドイツのシェアは、パームオイルの場合、1870年の8%から1885年の24%に増加している。同じくパーム核の場合、1870年の13%から1885年の44%に増加している。フランスのシェアは、パームオイルとパーム核とも1860年代から下降している。パームオイルとパーム核の輸出は、19世紀の終わりまでラゴスの輸出額の80%以上を占めた<sup>35)</sup>。

ちなみに、ラゴスの総輸出額は、1863-65年に年平均で166,763ポンド、1866-70年で同499,214ポンド、1876-80年で同632,439ポンドであった。ただし、大部分の取引は、19世紀の終わりまでバーターであったと言われる。イギリスからの輸出は圧倒的に綿織物が多かった。ドイツからは火酒、フランスからはワインやブランデー、ブラジルからはタバコやラム酒、その他、寶貝や塩、陶器、ビーズなどもラゴスに輸入された。ラゴスの総輸入額は、1863-65年に年平均で135,406ポンド、1876-80年で502,007ポンドであった。全般的に出超であったと言える<sup>36)</sup>。

ラゴスの奴隷貿易業者は、この貿易が禁止されたあと、容易にパーム製品の貿易業に転身したと言われる。ふたつの貿易は、貿易ネットワークが重なっていたし、貿易を行う主体も重なっていた。コソコは、アキトイエの復帰とともにラゴス北東のエベに追放されたが、有能なビジネスマンとして合法貿易に参入した。パーム製品や蒸留酒などの貿易で頭角を現した。アキトイエも合法貿易を行ったが、彼のあとを継いだドスンムはあまり合法貿易には関心がなかったようだ。ティヌブという元奴隷貿易業者もパームオイルや綿製品、象牙などの貿易を行った。1880年代の初めまでにラゴスの約35,000人の住民の半数以上が何らかの商業活動で生活していたと言われる<sup>37)</sup>。

ラゴスのパームオイルとパーム核の輸出は、1870年代から次第に困難に見舞われるようになる。ラゴスのパームオイルのヨーロッパ市場での価格は、1851年に40ポンド/トンであったが、1881年には30ポンド/トンになり、30年間で25%下落した。しかし、この価格低下は

34) Ibid., pp.124-125.

35) Ibid., p.127.

36) Ibid., pp.127-129

37) Ibid., p.143.

それほど深刻なものではなかった。なぜなら、初めのころの価格はやや投機的な性格をもち、上がり気味であったからである。また、蒸気船の登場によって運輸費が下落したからである。しかし、次の価格低下は深刻なものになったかもしれない。1881年から1885年の時期におけるパームオイルとパーム核のリヴァプールでの価格は、それぞれ順に約33ポンドと約13ポンドであったが、1886年から1892年の時期においては同じく約22ポンドと約11ポンドであった。とくにパームオイルの場合、この間に価格が2 / 3に下落している。これと並行して、ラゴスでの取引価格も1870年代から低下した。パームオイルやパーム核の輸出量は、増加しているの、ヨーロッパの貿易業者、ラゴスの輸出業者、内陸部の生産者ともに多少とも収益が確保できたものと考えられる。しかし、1890年になると、ラゴスでのパームオイルの輸出価格とイギリスでの平均価格との差額は、約7ポンド/トンで、また、パーム核の場合、同じく差額が4ポンド/トンであった<sup>38)</sup>。運輸費が、いずれも4ポンド14シリング/トンであったことを斟酌すると、パームオイルの場合は2ポンド強/トンの利益で、パーム核の場合は赤字になっていたことがわかる。その結果、3つのイギリス商会は、倒産するか、ラゴスから引き揚げた<sup>39)</sup>。

## 5. おわりに——奴隷の残存

外国への奴隷輸出の禁止は、ラゴスやその後背地に合法貿易への転換をもたらした。しかし、反奴隷制運動の目標は、外国への奴隷貿易を禁止することだけでなく、世界的な規模で奴隷制そのものを廃止することであった。イギリスがラゴスの内政に武力的に介入した1851年とその10年後にイギリスの植民地にした時点で、域内奴隷貿易と地域の奴隷制の問題は、まだ議論の俎上にのせられていなかった。アボリショニストたちは、現地の人々がヨーロッパと合法貿易を行い、農業生産に精を出せば、アフリカには新たな倫理観が芽生えると信じた。バクストンは、アフリカに小規模生産や独立の事業家のモデルを当てはめようとしたが、労働がどのように組織されるかについては明確なイメージがなかった。イギリスが1890年代にヨルバ人の内陸部を植民地化するまで、ラゴスの植民地政府は、貿易や輸送、生産に必要な労働の組織化を現地の人々に委ねていた。

1851年のラゴスへの武力介入とその10年後の植民地化のあいだ、イギリスはその王国を王の政治的権力下にある外国であるとみなしていた。アキトイエが1852年にビークロフトらと

38) A. G. Hopkins, (Dec. 1968) "Economic Imperialism in West Africa : Lagos, 1880-92," *The Economic History Review*, Vol.21, No.3, p.592.

39) Mann, *op. cit.*, p.159.

結んだ条約には、内部の奴隷制や域内奴隷貿易については何も言及されていなかった。たとえば、シエラ・レオネからラゴスや内陸部に帰還した人々のなかには奴隷の売買に関与し、奴隷を所有する者がいた。現地のイギリスの役人たちはこの行為を見て、非常に強い嫌悪感を抱いた<sup>40)</sup>。なぜなら、帰還者たちは、奴隷身分の恐怖を経験し、それからの解放を反奴隷制キャンペーンに負っていたからである。キャンベル公使やクロウザー尊師は、ラゴスやアベオクタに居住する帰還者に対して、奴隷を解放しなさい、さもなければ、イギリスの保護を失うと脅したが、ほとんど効果はなかったという。

フット（H. G. Foote）が公使に就任していた時期に、彼によって解放された奴隷の内わけが記録されている（表2）。1861年の3月12日から4月末までの7週間に彼の介入があって、499人の奴隷が解放されている。完全に自由になった奴隷と一定期間何らかの保護のもとにおかれる年季奉公人とに区分されている。後者が3 / 4 を占めている。少女や少年に年季奉公人が多いのは、何らかの保護のもとにおかなければ、再度奴隷化される恐れがあったからだと思われる。これらの奴隷は、シエラ・レオネからの帰還者が所有していたものである。1861年にラゴスがイギリスの正式の植民地になったことがこうした結果を生んだのかもしれない。イギリスに保護を求めることが解放につながると奴隷たちが考えたと思われるからだ。解放された者も年季奉公人になった者も身請けの代金が生じ、それを支払うために働かなければならなかった。

表2 フット公使によって解放された奴隷数（1861年3月～4月）

	年季奉公人	解放された奴隷
女性	90	91
少女	75	—
男性	99	31
少年	109	4
計	373	126

（出所） K. Mann, *op.cit.*, p.167.

ニューカスル植民地相は1862年7月、イギリス政府はラゴスの家内奴隷の状況および彼らをどのように取り扱うべきかを考えなければならない、と述べている<sup>41)</sup>。ロンドンからの明確な指示がないままに、ラゴスの奴隷制に関する植民地政策は、1860年代にゆっくりと形成された。1833年の奴隷制廃止法では、イギリスの植民地プランテーションだけでなく、海外植民地全体で奴隷制は永久に廃止される、と規定されていた。しかし、新しい植民地では奴

40) *Ibid.*, p.164.

41) *Ibid.*, p.168.

隷制を即時に廃止することは、由々しき政治的、社会的問題をもたらした。

パームオイル商人からラゴスの初代総督になったマッコスクリーは、シエラ・レオネおよびブラジルからラゴスに帰還した者たちをイギリス臣民とみなし、彼らはイギリスの法律のもとにあるとし、彼らが所有している奴隷を7年の年季奉公人にする、とした<sup>42)</sup>。彼はまた、奴隷主と奴隷あるいは年季奉公人のあいだの紛争を調停するための法廷を設けた。これは虐待を受けた奴隷が奴隷主を告発する場所であり、調停によって奴隷が解放された場合には、解放証明書を発行した。ここにはイギリス植民地以外からやってきた奴隷も含まれていた。奴隷主の奴隷に対する所有権も認められていて、奴隷が解放された場合、身請けの補償が行われることになった。ただし、奴隷の購入時期やその代金、逃亡の時期などを明確に証明することが必要であった。彼の基本的な姿勢は、合法貿易を促進することによって、また、イギリスの法律を適応することによって、奴隷制を漸進的に廃止させることであった。

1874年、アボリショニストによるロビー活動もあってイギリス政府は、その植民地および保護領における奴隷取引と奴隷制を禁止する宣言を公表した<sup>43)</sup>。これは、奴隷制のもっとも抑圧的な性格を根絶することを目的とされた。しかし、これによって奴隷制がすぐに根絶されたわけではなかった。

---

42) Ibid., p.168.

43) Ibid., p.163.